令和2年度学内版 GP　成果報告書

<table>
<tr><td>取組名称</td><td colspan="2">信州活用型ビジュアル教材による学部横断型ディスカッションの促進</td></tr>
<tr><td>実施組織
（または対象のカリキュラム）</td><td colspan="2">農学部農学生命科学科（森林・環境共生）</td></tr>
<tr><td>※連携する他学部・機関がある場合は記入</td><td colspan="2">工学部・建築学科、教育学部・技術教育講座、全学教育機構</td></tr>
<tr><td>実施責任者（所属）</td><td colspan="2">岡野哲郎（農学部）</td></tr>
<tr><td>取組の目標</td><td colspan="2">本取組は、①信州の豊富な実例を題材としたビジュアル教材（信州活用型ビジュアル教材）を作成し、②学生がそれを視聴した上で、③異なる学部の学生（とくに2年次以降）がディスカッションをおこない、各自の専門の位置づけをより多角的に知るとともに、学際的な視野を持てるようになることを目的とする。</td></tr>
<tr><td>1.
目標達成のために行った活動と成果
（箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする）</td><td colspan="2">1. 信州の事例を題材としたビジュアル教材を作成した（長さ 5 分程度）。新型コロナウィルス感染症への対応として、各地の事例を収集することが困難となったため、農学部周辺の林業現場から建築現場、木製品の最終消費者までの流れがつかめる構成とした。
2. 上記の動画を農学部開講講義（森林利用学）等で受講生に視聴してもらい、解説を加えながら、学生の「気づき」をうながした。学生のアンケートからは、「講義で習った木材生産の流れを理解できた」「木材は建築材のイメージが強かったが、様々な用途に利用されていることがわかった」「伊那市内に生産から利用までできる会社があることを知った」「どの工程でも職人は目視や手触りで完成度を確認していて技術が体に染みついていると感じた」などの意見が挙げられ、動画を用いた学習は学生に好評であった。また、いわゆるコロナ禍のもとで信州の産業の実際を見学することが困難な学生が、現場見学にかわるものではないものの、地域産業のイメージをつかむことができたと考える。
3. 工学部建築学科において学部横断的な実験科目を開講し、それを農学部学生が受講した（建築環境共学実験 3 名）。</td></tr>
<tr><td>2.
目標達成度に関わる所見と今後の展望
（達成の度合いを選び，そう評価する理由と今後の展望を記述）</td><td>c. 半ば達成できた</td><td>（評価理由）
・学部横断的なディスカッションは、学部横断の実験・実習科目を通じておこなう予定であったが、新型コロナウィルス感染症対策のため、開催は著しく限定的であった。また、eALPS の通信量が急増したことから、その対策として本年度はビジュアル教材を eALPS 経由で学生に視聴させることは差し控えた。そのため、作成したビジュアル教材を視聴できたのは、対面講義であった科目に限定された。
・一方で、これまでの取り組みによって、従来は少なかった木造を中心とする設計事務所等への就職者数が増加するなど（工学部）、学生が学修内容を我が物としていることが明らかになりつつある。</td></tr>
</table>

		（今後の展望） ・次年度は、今年度作成したビジュアル教材を用いて学部横断的なディスカッションを実施する（コロナ対策で講義・実験がオンライン化された場合にも実施できるよう、手段を整える）。 ・教材の内容も、一般住宅だけでなく、信州の代表的な伝統建築物や、新たな特色となりつつある公共建築物などに拡張し、学生の信州各地の現場での自主的学修をうながすような構成とする。

令和2年度学内版 GP　成果報告書　　（記入例）

※ページ制限はありません。
※「3．支出内訳」は適宜行を増減して記載ください。配分金額は使いきりでお願いします。

取組名称	共通教育で『学位授与の方針』の基盤を作る
実施組織 （または対象のカリキュラム）	全学教育機構
※連携する他学部・機関がある場合は記入	
実施責任者（所属）	機構太郎　（全学教育機構）
取組の目標	共通教育の授業のシラバスで， ・DP 要素を教育目標として選択し， ・その目標をどのような手段で達成するのか を書くようにする
1． 目標達成のために行った活動と成果 （箇条書きで項目ごとに番号を付けて記載。成果の詳細は必要に応じて別添とする）	1．学位授与の方針の DP 要素について，関係文献を読んで，それらがどのような能力であるのかを研究した。 2．学位授与の方針の DP 要素について，関係文献を読んで，授業でどのような活動を行えばそれらを身に付けることができるのかを研究した。 3．シラバス改善運動でめざましい成果をあげている大学を教務委員3名が視察し，ノウハウの提供を受けた。 4．シラバスチェック体制を見直し，上記3の報告会を兼ねてシラバスチェックにあたる教職員を主な対象に FD を行った。（参加者数：20 名） 5．上記1と2の成果を浸透させるため全教員を対象にシンポジウムを開催し，外部講演者2名を招へいした。（参加者数：40 名）

2． 目標達成度に関わる所見と今後の展望 （達成の度合いを選び，そう評価する理由と今後の展望を記述）	a．達成できた	（評価理由） 選択した DP 要素とその達成手段がシラバスに揃って書いてある授業科目は，平成 29 年度シラバスでは 41%であったが，平成 30 年度では 89%と大きな伸びを見た。また平成 29 年度では，シラバスの書き直しを依頼した件数が平成 29 年度の半分になった。ここから，所属教員の理解の浸透において大きな成果があがったものと自負している。
		（今後の展望） 今後はエビデンスをシラバスだけに求めるのではなく，取組の成果を直接測ることができるような指標の開発をめざしたい。

3．
支出内訳
（「番号」欄に，1．の対応する項目番号を記載）

※この項目は公表対象外です。

区分等	金額（円）	支出内訳	番号
人件費			
謝金	60,000	講演会講師謝金（2名）	5
講師等旅費	53,000	講演会講師旅費（東京～松本） 講演会講師旅費（大阪～松本）	5 5
旅費交通費	156,000	関西国内大学視察（3 名）	3
備品・消耗品費等	231,000	高等教育関係図書一式	1，2
役務費			
計	500,000		